
北から南から

福島赤十字病院（福島県）

中村郁夫

当病院は、福島県の北部に位置し人口29万都市の県庁所在地で、近くには四季の表情を鮮やかに映す吾妻連峰や、豊富な湯量を持つ湯煙の絶えない「いで湯の里」があり、東京からJR東北新幹線で1時間30分と、多くの方が来県される観光地に在ります。

それでは病院の現状についてご紹介します。

ベット数420床、診療科18科、外来者数1日平均900名、職員数410名と当地方の基幹病院です。

検査部の構成は、部長（内科部長兼務）1名、技師12名（男子8名、女子4名）、助手2名の総勢15名です。少数のスタッフですが、時間外はポケットベルによるオンコール制で月2～3回の当番制により、24時間体制を採っています。日夜信頼される臨床検査業務に励んでいます。

平成6年6月に本館増改築終了後、同年7月外来採血室（現在看護部担当）が新設され、現在に至っています。

今後の課題としては、現在の厳しい医療状況を見つめ、我々検査技師が生き残る為に、検体検査は勿論、採血業務、あるいは臨床への働きかけ、今まで看護部が実施していた業務を検査技師がチームワークを駆使して取り込むこと、検査機器の導入、原価意識の高揚を図り支出の削減に努めることは勿論、トータルシステムの実現に向けて努力して行かなければならないことです。

私達を取り巻く環境は、社会面においても医療面においても特に大変な時期を迎えています。このような厳しい時こそ、患者さんに信頼される病院ということを忘れず、検査部一同一丸となって心新たに頑張っていきたいと考えています。



北から南から

深谷赤十字病院検査部（埼玉県）

橋本達也

我が深谷赤十字病院は、埼玉県北部の深谷市に立地し、県北隔離病舎および救命救急センターを備えた病床数438床の総合病院であります。

深谷市は、明治時代に財界の大御所として活躍された渋沢栄一翁の生誕地であり、またこの地で穫れる「深谷ねぎ」は大変美味しいと全国的に喜ばれております。

このほかには市北部で製造される「レンガ」が知られており、これは東京駅建造に使われたとのことです。

何年か前には東京駅を模した「深谷ステーション」が完成し、今では市のシンボルとなっております。

当院検査部は検査第1課（一般検査・血液検査・生理機能検査）、第2課（生化学検査・血清検査・輸血検査・微生物検査）そして第3課（病理組織検査）で構成されており、“患者さんの身になった検査”をスローガンに、全員一生懸命の毎日であります。

夜間は当直体制をとっており、緊急検査として尿検査（タンパク・糖・ビリルビン・潜血・ケトン体・ウロビリノーゲン・比重・PH・白血球）、血液検査（赤血球・白血球・血色素量・血球容積・血小板）、生化学検査（電解質・AST・ALT・LDH・血糖・BUN・クレアチニン・CPK・アミラーゼ）、血液ガス、血液型、輸血関連業務（交差試験を含む）、梅毒反応、HBs抗原、妊娠反応および髄液検

査（細胞数）を行っています。さらに必要に応じて凝固線溶検査、アンモニアおよびCRPにも対応しております。最近は、当直時の検査が増加しており、オールナイトになることがしばしばであります。しかし、“臨床検査技師としての使命感”に燃え、眠気と闘っております。

話はガラリと変わりますが、当検査部の自慢の一つとして「美人???の女性が多い」ということがあげられ、他の部課室から羨ましがられております。ただし、念のため付け加えますが、この中には自称「昔はずごく美人だった」という人達も大分含まれておりますが。このような恵まれた？環境のなかで仕事ができるわれわれ男性陣は大変幸せであり、毎日の出勤がとても楽しみです。

今後はますますきびしい医療情勢となることが予想されますが、今まで以上に検査部全員力をあわせ、“より患者さんに貢献できる検査部”を目指し頑張っけてゆきたいと思っております。もし、お近くにお越しの節は是非お立ち寄り下さい。検査部一同心より歓迎いたします。



北から南から

浜松赤十字病院（静岡県）

青 山 清 志

浜松市は静岡県の西部に位置し、人口574,292人（平成9年8月1日現在）の楽器、オートバイ等の県下最大の工業都市です。また自然環境にも恵まれ、風光明媚な日本3大砂丘の1つで知られる中田島砂丘や鰻で有名な浜名湖及びフラワーパーク、フルーツパーク等があり四季を通じて観光客が絶えない。2004年には国際園芸博が浜松市庄内地区において半年間「花・緑・水～新たな暮らしの創造」をテーマに開催されます。次に浜松地方の代表的な方言を紹介しましょう。オートバイ→ポンポン、まぶしい→ひづるしい、やりましょう→やらまいか等がありますが、現在若い人たちにはほとんど使われていません。

さて当院は、昭和13年3月17日に日本赤十字社静岡支部浜松診療所として、病床数9床、19名の職員によって開設された。また昭和20年4月1日には浜松赤十字病院と改称し、昭和33年9月1日より総合病院となった。昭和49年3月には時代を先取りし健康相談センターを開設した。平成6年12月17日より浜松学芸高校音楽科の生徒さんによる院内コンサートが、平成7年12月2日から日赤いきいき健康講座が開催され好評をえている。平成7年7月17日より市民のニーズにこたえ夜間診療（フレックス・タイム制）を開始し、急変時や、共働きの家庭が増え、ライフスタイルの変わるなか、患者さんには大変喜ばれている。さらに平成9年7月1日より訪問看護ステーションを開設した。

さて当院において映画「金色のクジラ」の一部が平成8年2月よりクランクインし、同年6月26日にクランクアップした。内容は浜松地方が舞台で白血病の子供を助けるために、家族、隣人、医療関係者が心をあわせる実話

をもとにした童話で、命の尊さを訴えて多くの読者の共感をよんだものを映画化したものであり、当院の職員も数名出演しています。機会が在りましたら、是非御覧になってください。

現在当院の病床数→394床、病棟数→7棟、診療科目→18科、職員数→376名、特殊部門→健診センター、人工透析室

検査部のスタッフは技師17名、助手1名、事務1名、検体処理1名、洗浄1名、計21名の構成で技術向上は勿論の事、経済面も視野に入れ日々努力しています。

浜松地方は病院銀座と呼ばれ、当院を中心に3Km圏内に6つの主要病院が犇めき激烈を極め医療は飽和状態にある。また激変する厳しい医療環境のなか検査室がターゲットとされやすい環境にあり、それをいかに打破するかは技師の意識革命と他部門とのコミュニケーション、患者サービスの向上、経済面での貢献度に集約されるのではないのでしょうか。



北から南から

福井赤十字病院（福井県）

桑 嶋 溪 一

福井赤十字病院は、大正14年日本赤十字社福井支部病院として創立されました。

福井市のシンボル足羽山と兎追山の間に位置します。当地は戦国時代に柴田勝家が築城したのが礎となっている。

昭和に入り戦災や福井震災で大きなダメージをうけ昔の面影は失われたが、「不死鳥の街」をスローガンに繊維産業を中心に復興を成し遂げ、北陸を代表する近代都市として発展している。

病院もまた、これらの災害を通して苦難とともに発展を遂げ、地域住民の期待を担い、今日に至る。

施設は616床（一般556、結核40、伝染20）、診療科18、外来患者数1,450人。

昭和35年より検査部として発足し、平成6年9月より病理部が独立し、現在の検査部は2課7係となっている。

スタッフは部長1（兼内科部長）・臨床検査技師26・助手8の35名です。

検査部の配置としては、ワンフロアでなく手術室の跡地に設置されたため各係が分散、特に生理室が遠くにある事と一般検査室が2ヶ所に分散されていることなど効率がやや悪い現状にある。今一番願うことはワンフロア制、オーダリングシステムの導入である。

患者さんの待ち時間短縮化、業務効率の向上、迅速で正確な検査報告などを目標に将来の本館建設に向けての試練の時である。

福井発観光情報 越前蟹は11月6日解禁。

越前水仙、波の華は12月～1月が最も見頃。



北から南から

高槻赤十字病院検査部（大阪府）

山 本 裕 司

我が町高槻は、京都と大阪のほぼ中間にあり、緑の山々を背にし、とうとうと流れる淀川に面し、古来より水陸の要衝にあります。この地は弥生時代においてなりわいがあり、その後には西国街道の宿場町として、また高槻城の城下町として栄え、現在では人口38万余を擁するベッドタウンに膨張し、なお急速な変化を続けています。

当院は昭和16年に日本赤十字社大阪支部病院分院「阿武野勝景園」として創設され、結核療養病院として診療を開始しました。

昭和45年、北摂千里丘陵での万国博覧会の開催と相まって、高槻、茨木など京阪神のベッドタウン化に伴い、地元より地域医療に対する要望が高まり、この年に一般科の外来及び入院患者の診療を開始し、これを機に病院名を「高槻赤十字病院」と改め、総合病院としての第一歩を踏み出しました。

現在では、敷地面積58,841㎡（17,831坪）、総延床面積27,265㎡（8,262坪）、病床446床、外来900人／日、職員415名で構成され、診療科は内科、呼吸器科、小児科、外科、整形外科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、皮膚科、泌尿器科、麻酔科、リハビリテーション科、放射線科の13科で運営されている。

検査部は3課6係で構成され、生化学、血清、血液、一般、細菌、病理、生理に技師22名（パートを含む）を配置し、夜間の緊急は

近隣に住んでいる技師のオンコールで各診療科の要望に対応しています。

当検査室は4年前に初めてコンピューターなる物がいり、当時のシステムのどの部分にどの様に利用し、検査室はもちろんの事、他部門（診療科、看護部門、事務部門等）においても合理的かつ簡便になるよう理解と協力と教育を忘れる事無くソフトを構築しました。結果、初めてずくしのコンピューター化にも拘わらず大きな戸惑いや不平、不満、トラブルも少なく、スムーズに移行でき患者サービスにも大きく貢献できました。

厳しい医療環境の中、我々検査技師に課せられた題材は多く、環境・立場・社会情勢等を正確に捕らえつつ、他院の仲間とも交流を深めながら乗り切っていきたいと思います。



後方に広がるベッドタウンと豊かな敷地

北から南から

山田赤十字病院（三重県）

大西学

山田赤十字病院は、「お伊勢参り」で親しまれる伊勢神宮のふもと御蔭村にあります。「おかげ参り」と称して、老若男女の集团的伊勢参りがはやりました。救護事故も多く、そのために病院が設立されたとの説があります。

明治37年2月、四郷村亀山に内科、外科、産婦人科、80床で開設しました。病室は畳敷き、照明は行灯であったと記録されています。

大正15年6月、現在地の御蔭村高向に移転、その後幾多の苦節を乗り越え発展を続け、県の中核病院として医療を提供し、県民に親しまれてきました。

現在は、19科635床。1日平均外来患者数は1,900人、1日平均入院患者数は582人、職員数は896人を数えます。

明治44年既に病理試験室を設けたとの記録があり、ミクロトーム、孵卵器、パラフィン

オーフェン等の器具を備えていました。

最近の検査部関連の年表は次の通りです。

- S.58. 4 検査部当直制導入
- S.60. 4 救命救急センター開設
解剖室（162㎡）改築
- H. 2. 8 病理部独立
- H. 3.12 電子顕微鏡設置
- H. 5.10 自家骨髄移植始まる
- H. 8. 2 HIV 拠点病院に指定

現在のスタッフ数

| | | | |
|-------|------|-----|-----|
| 臨床検査部 | 3課7係 | 技師数 | 29名 |
| 病 理 部 | 1課2係 | 技師数 | 5名 |

検査室が改装されて今の所に移ってから25年以上がたちます。器械も技師も当時の数倍に膨らみ、次なるステップを考えなければいけない時期です。その手始めに採血ルームの設置、将来はオーダリングシステムを目指して若い人も交えた構築委員会をひらき、一步一步進んでいるところであります。



〔大正15年〕



〔平成3年〕

北から南から

中町赤十字病院（兵庫県）

衣笠芳久

昭和20年に誕生した中町赤十字病院は、当初、柏原赤十字病院の分院として設立され、昭和30年11月10日に3科20床で発足しました。

病院近代化第一期工事が昭和50年に完了し、3科58床で現在の地に移転しその後、昭和57年には増築工事が、平成5年には老人保健施設の新築移転が完了しました。現在、手術部門・外来診療部門・療養環境の改善を目的に増築工事が行われており9月末に完成します。ついで既存建物の改修が順次行われ、来年夏には6科110床で完成の予定となっております。これには、変遷する近代化医療や社会事情に対応すべく地元4町の協力の下、多可郡内唯一の公的医療機関として地域医療の負託に応えるべく、職員が一丸となって努力してきた賜であると思います。

兵庫県下には5つの赤十字病院があり、当院は“日本のへそ”“高校駅伝”で知られる西脇市の北西に位置する多可郡中町にあります。自然に恵まれた環境ですが、他の内陸部同様人口の高齢化が進んでいます。多可郡内（人口約34,000人）の65歳以上の人は約25%となっています。

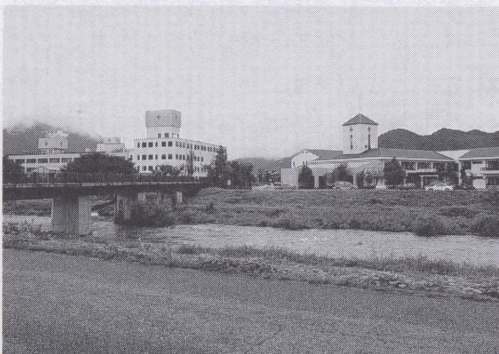
老人保健施設は全国で最も早く昭和62年開設されたもので、まさに地域の要望に沿った

ものです。

さて、検査室は技師5名で切り盛りしています。自称、新しい物好きの検査課長は次々と新型自動分析機・計測機器に更新し、診療側の要望に応じてきましたが、最近は年のせいかレトロ機器をこよなく愛するようになったとは部下の弁?!

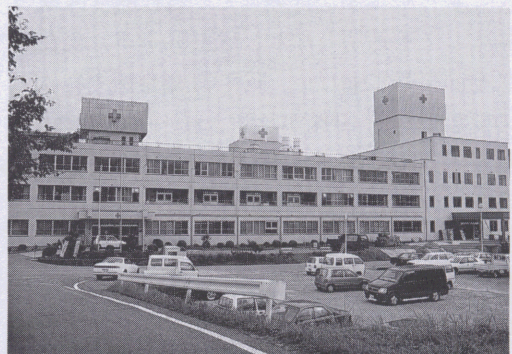
小規模検査室の利を生かし、小回りが利くよう、誰もがどの分野でも担当できるよう努めています。これから医療保険制度が大きく変貌すると予想される中、舵取りは困難が予想されますが、患者さんが中心となる、より良くより速い検査データを提供出来るよう、心がけたいと考えています。

多可郡は4町からなり、中町は灘五郷に供する酒米山田錦の産地、加美町は平安時代には全国的に名を馳せ和紙の代名詞になった杉原紙と、使えば玉の肌になるという凍りこんにゃく“玉の艶”の産地で知られています。町北端には名峰千ヶ峰がそびえ、四季を問わず多くの登山者がいます。八千代町は敬老の日発祥の地で高野豆腐・椎茸が有名です。また、黒田庄町は神戸ビーフの生産地で知られ、全国でも人気投票No.1のオートキャンプ場（東はりま日時計の丘公園）があり、アウトドア派には喜ばれる施設が多数あります。お近くにお越しの際は是非当院共々お寄り下さい。



建物全景

右：老人保健施設 中央：増築中の建物
左：既存の病院建物



既存建物と増築中の建物（右）

平成9.9完成予定

北から南から

岡山赤十字病院（岡山県）

石原紀之

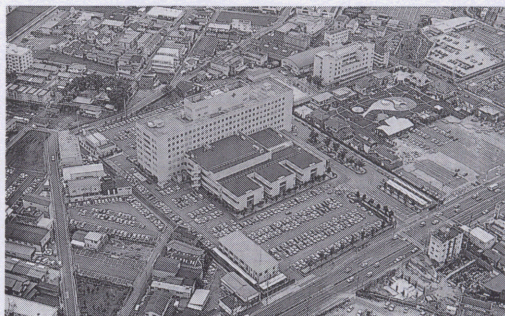
岡山市は戦国の雄、宇喜多氏によって形作られた城下町で、今年は築城400年になり“しろゆめロマン岡山”のキャッチフレーズでいろいろの行事、イベントが行なわれております。また、岡山は中四国を結ぶ瀬戸大橋。関連する山陽自動車道は東西を結び、中国横断自動車道が太平洋側と日本海側を直結し、高速交通網のクロスポイントとなり、瀬戸内経済文化圏の中核都市を目指しております。

当院は昭和2年5月28日に内科、外科、産婦人科の3科50床で開院しました。その後順調にいていましたが、昭和20年6月の空襲で建物の外観だけを残して焼失し、病院の疎開、戦後の復興、増改築を経て昭和36年には病床数460床になり、昭和44年玉野赤十字病院を吸収合併、昭和58年に救命救急センター開設と名実ともに総合病院となりました。しかし、戦火をくぐった建物はいたみがはげしく、また駐車場がないなど、近代的な医療の場として不適切となり、昭和60年5月現在地に全面移転しました。昭和61年全国で初めての開放型病床40床が承認され、平成3年救急ベッド40床の増床が承認され500床となりました。平成9年1月岡山県の基幹災害医療センターの指定を受けました。今年は創立70周年で、記念式典や文化祭、記念誌の発行などのイベントがあり“手をつなぐ温もり一地域とともに”の記念テーマをモットーに、信頼され親しまれる病院として、赤十字病院の

使命を全うしてゆく決意が院長よりなされた。

検査関係は平成2年に組織改組により病理部が新設されました。検査部は4課11係で部長（兼）、技師27名、助手2名、病理部は1課2係で部長、技師5名で構成されています。昨年、岡山で大腸菌O-157による食中毒の集団発生が全国で初めて学校給食により発生し、当院にも重症、軽症の患者が何人も入院し大変でしたが、今年も近くの岡山労災病院で食事による集団発生や、散発発生があり細菌検査はおおいそがしでした。

当検査部も厳しい医療環境のなかで、検査の効果的な運用を図るために、自動分析装置の導入、システム化、組合せ検査や外注検査の見直しを行なっております。日常検査以外にも過疎地域への検診事業、一日赤十字の健康クリニックにも協力していますし、阪神淡路大震災には延べ11名の技師が救護活動に参加しました。本年度中には化学、血液、免疫血清検査の新システムが稼動する予定ですが、これからも患者サイドにたった検査、医師のニーズにあった検査、採算効率をも考えて努力したいと思います。



北から南から

松山赤十字病院（愛媛県）

宮 脇 良 樹

松山市は愛媛県の中央部、松山平野にあり、東は西日本最高峰石鎚山を背景とし、西は波静かな国立公園瀬戸内海が望めます。

気候は瀬戸内海気候に属し、年間を通して温暖で自然災害も極めて少なく、絶好の自然条件をそなえています。

松山の名は、慶長7年（1602年）加藤喜明が築城した松山城にちなみ名付けられたといわれています。明治6年（1874年）愛媛県庁が設置され県都となり政治、経済の中心都市として成長しています。また、俳句（正岡子規）、小説『坊ちゃん』（夏目漱石）などで有名です。

松山赤十字病院は1913年松山市小唐人町（現在の大街道3丁目）にベット数60床で開設された「日本赤十字社愛媛支部病院」で、以来愛媛県の中核的医療施設の1つとして地域医療と保健衛生の向上に貢献してきました。

1943年1月、現在の「松山赤十字病院」に改称。1945年7月の松山大空襲で病院施設を焼失し、現在地である松山城の東北地区、小学校、中学校、愛媛大学等がある文京町にベット数100床の病院として新築移転し、現在、約18,300㎡の敷地に7棟の建築物で構成されている。

800床のベットと25科の診療科目を備え、医師、看護婦、医療従事者など合わせ、1,150

名の病院職員が医療業務や救護活動に従事している。外来患者数は1,900～2,000名／日で、入院患者数は750～760名ほど、平均入院日数は27日間となっている。

中央検査室には検査部と病理部から構成され、検査技師は随時勤務変更をおこなっている。検査部は第1課～第5課まであり、第5課は臨床工学技師が所属している。中央検査室の総人員は51名（臨床検査技師36名、臨床工学技師6名、医療技師2名、兼務医師1名、パート4名）です。

中央検査室のシステム化は、各部屋別のコンピューターで全体を統一すべく予算申請を行っていますが、まだ決まっていません。

検査部では緊急検査24時間体制を1983年（昭和58）より導入し、日常検査の時間内における緊急検査体制にも積極的に協力していますが、病院全体のシステム化が遅れているため人的資源の有効的活用が不足しています。

医療環境の業務改善が厳しく求められている昨今では、まず病院全体の計画的なシステム改造を行う必要性、また、従来より行われている各検査項目別の検査室から、検体別検査システムなど新しい発想の検査室構成を模索する時代になってきたものと思います。

病院検査室運営に関しても従来の検査項目、件数の増加すなわち収益増は望めない状態で、将来にむけて新しい計画的投資及び運営方法を構築すべく悩んでいます。



北から南から

鹿児島赤十字病院（鹿児島県）

町 邦彦

南国鹿児島といえば世界有数の活火山桜島と、明治維新の立役者、西郷隆盛で有名です。

鹿児島赤十字病院は、薩摩半島の東側、鹿児島市の南端、平川町にあり錦江湾、その続きには鹿児島のシンボル桜島を望む風光明媚な場所に位置しています。大正12年に海浜院を日本赤十字社が買収し、現在の鹿児島赤十字病院となりました。現在リュウマチ科を中心に、内科・呼吸器科・外科・整形外科・放射線科・理学診療科の7つの診療科で構成されています。その他、リュウマチ検診・骨粗しょう検診・へき地診療など県民の地域医療に大きく貢献しています。

病院の概要としては、敷地面積18,176.64㎡、建物面積6,264.37㎡、ベッド数170床（一般120床、結核50床）、職員数143名（検査

室4名）です。

検査室の構成は、生理検査1名、生化学・血清・一般・血液検査を3名で行っています。生化学・血清検査は、日立7150をメインに日立7050・ベックマンE3A・ベックマンCX3などで1日約100本を検査しています。血液検査は、テクニイコンH1・シスメックスNE1500を用いて検査しています。そのほかガス分析装置として、カイロン社の278ガス分析装置も導入されています。

医療、とりわけ検査をとりまく環境は厳しさを増しています。我々検査技師は早く、そして正確なデータを医師に報告する事で患者サービスを向上させるという責務の他に、病院経営の一翼を担っているという自覚と信念をもって業務を行って行くべきだと考えています。

